

Title	ダイクシスの定義と下位分類
Author(s)	渡辺, 伸治
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 161-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10901
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ダイクシスの定義と下位分類¹⁾

渡 辺 伸 治

In diesem Betrag werden verschiedene Begriffe der Deixis zusammengefasst, die in der Fachliteratur zu beobachten sind. Zuerst werden in Bezug auf den Begriff der Deixis drei Definitionen herangezogen. D.h., Deixis wird als direkte Referenz, als kontextabhängige Referenz und als origorelevante Referenz charakterisiert. Dann wird zusammengefasst, wie die Fachliteratur deiktische Dimension und Origorelation beschreibt. Zum Ende wird gezeigt, wie deiktische Ausdrücke beschrieben sind.

キーワード：ダイクシス, ダイクシス表現, ダイクシスの次元

1. はじめに

ダイクシスが言及される論考には、特定の語彙、文法形式の考察において一つ概念装置としてダイクシスが問題になる論考と、ダイクシス自体を主な考察対象とする論考がある。前者の論考は、日本語だけを取り上げても、例えば、指示詞コソアの研究、「行く／来る」の研究などの数多くある。一方、後者の論考は前者と比べて数少ない。これは、言語研究は、第一義的には言語についての研究なのであり、ダイクシスといった概念自体は、その際に用いられる一つの説明原理という位置付けがなされることによるのであろう。しかし、ダイクシス自体を扱った論考も少ないながらも存在し、また、特定の語彙、文法形式を扱った論考においても、ダイクシスが言及される場合には、様々な形でダイクシスが規定されている。このような状況の下、本稿の目的は、先行研究におけるダイクシスに関する言説をまとめ、比較、考察し、本稿ではダイクシスをどの様に捉えるかを述べることである。

2. ダイクシスの捉え方と定義

議論を明確にするため、本稿のダイクシスの定義と、それに含まれる原点の定義を最初に挙げておこう。

ダイクシス： 原点を言語外世界（言語内世界²⁾）の特定の要素にリンクさせ、

原点から指示対象を言語を用いて指し示し、言語的文脈に取り込むこと

原点： ダイクシス表現の発話の際に仮説的に生起する点的な抽象的要素

1) 本稿は渡辺 (2001), 渡辺 (2007) を修正, 拡大したものである。

2) 言語内世界の問題はテキストダイクシスの問題であるが、本稿ではテキストダイクシスは考察しない。

ダイクシスの定義は、基本的には、Sennholz (1985) と Diewald (1991) のダイクシスのモデルを参考にしたものであり、原点の定義は、Sennholz (1985) の原点に関する記述を参考にしたものである。ポイントは次の二点である。

- A: ダイクシスを指示の下位分類と捉え、ダイクシスを他の指示タイプから分類する基準は、原点が関与することと捉えている点。
- B: 「指し示し」「取り込む」という記述が表すように、ダイクシスは行為であり、その行為は、原点を特定の要素にリンクさせる行為と、指示対象を言語的に指し示す行為という複合的行為であると捉えている点³⁾。

どちらにも原点が言及されているように、本稿のダイクシスの定義は原点を根幹に据えた定義である。図式化すると次のようになる。点線の矢印は原点をリンクさせる行為であり、実線の矢印は言語的に指し示す行為である。

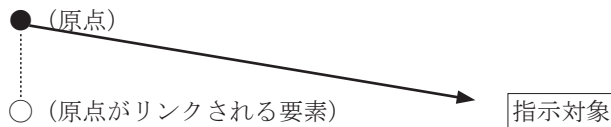


図1 ダイクシスの図式化

本章では、まず、本稿の定義が参考にしていないSennholz (1985)、Diewald (1991) のダイクシスのモデルを考察、説明する。続いて、ダイクシスの一側面を適切に捉えているが、原点が言及されていないため、本稿ではダイクシスの定義としては採用していないダイクシスの捉え方を概略する。

なお、本稿のダイクシスの定義は、絶対的真としてアプリアリに存在する概念の定義ではなく、ある定義をおこなえばそれだけで成立する定義である。従って、定義の意義は、どのような具体的な言語現象がどの様に説明できるかによって決まる。もっとも、本稿は、言語現象の分析のための前提となる諸概念の整理が主目的であるので、具体的な言語現象にほとんど触れないものである。

2.1. Sennholz (1985)

Sennholz (1985:1) は、ダイクシスの公理 (Axiome der Deixis) という用語で次の規定⁴⁾をおこない、以下の図⁵⁾のようなダイクシスのモデルを提示している。

第一公理：ダイクシスは特定の様式で発話場面に投錨される現象である

第二公理：ダイクシスの基本構造は二つの要素からなる方向付けられた関係である

3) 一般的に指示、ダイクシスは行為であると捉えられているが、ダイクシスを広義に捉える場合もある。例えば、「行く/来る」をダイクシス動詞とする場合である。

4) 第一公理 *Deixis ist ein Phänomen, das in besonderer Weise in der Äußerungssituation verankert ist.* (p.1). 第二公理 *Die Grundstruktur der Deixis besteht in einer zweistelligen, gerichteten Relation.* (p.1).

5) この図はSennholz (1985:58) の図を大幅に変更したものである。

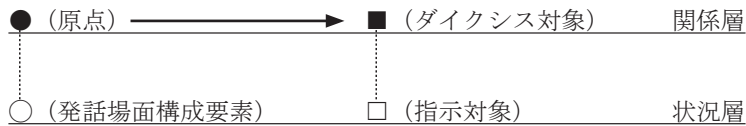


図2 Sennholzのダイクシスモデル

関係層 (Relationsebene) は、原点 (Origo) とダイクシス対象 (Deixisobjekt) が、原点を起
 点に、ダイクシス対象を着点とした形で、ベクトル的な「方向付けられた関係」をなして
 いる層である。第二公理はこの関係を規定している。

状況層 (Situationsebene) は言語外世界であり、状況層の構成要素のうち、ダイクシスに
 関与するものは、発話場面構成要素 (Äußerungsgröße) (発話者、発話時、発話場所) と指
 示対象 (Sachverhaltsgröße) (発話役割に関する指示対象としての発話者と聞き手、指示対
 象としての時間、指示対象としての場所) である。

第一公理は、原点は発話場面構成要素に投錨されるという規定であるが、これは、原点
 の置き方が無標的な場合の記述である。原点は、有標的には発話場面構成要素以外の要素
 に投錨されるので、第一公理は、原点の置き方の一部のみを記述していることになる。原
 点がある要素に投錨されるという規定は、Fillmore (1997), Levinson (1983) などにも見ら
 れる一般的な規定である。第二公理は、Sennholz (1985:168) が「方向付けられた関係、ダ
 イクシスの方向という性質は、根源的には指し示しの概念に根拠付けられている」⁶⁾ と述
 べているように、言語的指し示し行為に基づいたものである。

Sennholzのダイクシスのモデルのポイントは、筆者の解釈を交えまとめると、次のよう
 になる⁷⁾。

6) die gerichtete Relation, der Richtungscharakter der Deixis, ist ja ursprünglich im Zeigkonzept begründet. (p.168)

7) Sennholzの次のような記述に基づいている。訳は意識の部分もある。

1) Für den Fall einer nichtdeiktischen Äußerung wäre die Relationsebene (...) wegzudenken.(p.6) 「ダイクシス
 表現以外の発話では関係層はないものとして考えられる。」

2) Die Origo aber existiert als eine deixistheoretische Größe – nur bei einer deiktischen Äußerung.(p.3) 「原点は
 ダイクシス表現の発話の際にダイクシス理論上の要素としてのみ存在する。」

3) daß die Relationsebene gleichsam als Folie auf die Ebene der Äußerungssituation gelegt wird, und zwar so,
 daß die Origo sich mit Ort, Zeit und Träger der Äußerung deckt. (p.5) 「関係層は、原点が発話者、発話場所、
 発話時と重なる形で発話状況の層の上にならば箔のように置かれる。」

4) 'Origo',... 'Deixisobjekt'. Diese Begriffe sind als Postulate der Theorie anzusehen, sie sind empirisch nicht
 unmittelbar festzustellen bzw. keine physikalischen Größen. Sie haben jedoch – empirisch feststellbare –
 physikalische Korrelate in der Situation: 'Äußerungsort', '-zeit' und '-träger' für die Origo und 'Sachverhaltsort',
 '-zeit' und '-träger' für das Deixisobjekt. (p.7) 「原点とダイクシス対象は、理論上の仮説的要素であり、経
 験的には直接認識できず、物理的な要素でもない。ただし、言語外世界である状況層に、経験的に認
 識できる対応した物理的な要素を持っている。原点に対しては、発話者、発話時、発話場所、ダイク
 シス対象に対しては発話役割に関する指示対象、指示対象としての時間、場所である。」

5) Die Versetzungsdeixis ist nämlich gerade dadurch gekennzeichnet, daß die Äußerungsgrößen und die Origo
 voneinander getrennt sind.” (p. 225) 「原点転移は、発話要素と原点が分離されることによって特徴付けられる。」

6) Die Ausdrucksmittel (Deiktikon und eventuelle Zeiggeste) spezifizieren mehr oder weniger genau die
 (gerichtete) Deixisrelation und lokalisieren damit von der Origo ausgehend über das Deixisobjekt den Sachverhalt.
 (s.5) 「ダイクシス表現 (場合によっては非言語的指差し行為を伴う) は、方向付けられた関係を特徴付
 けし、原点を起点としダイクシス対象を経由して指示対象を定位する。」

7) Dieser Schlüsselbegriff 'Origo' (...) hat mithin zwei markante Funktionen: zum einen Verankerungspunkt, zum
 anderen Ausgangspunkt zu sein. (p.3) 「原点は、状況層にある要素とリンクされる要素としての機能と、
 方向付けられた関係の起点としての機能という二つの機能を担っている。」

- A. ダイクシスは行為である⁸⁾。
- B. ダイクシス表現の発話は、仮説的な心的概念である関係層、原点、ダイクシス対象を生起させる。
- C. 関係層では、原点が起点、ダイクシス対象が着点になっている方向付けられた関係が見られる。
- D. 原点は、無標的には発話場面構成要素、有標的にはそれ以外の要素にリンクされ、ダイクシス対象は指示対象にリンクされる。

本稿のダイクシスと原点の定義は、主に、以上のようにまとめたSennholzのダイクシスのモデルに基づいている。ただし、本稿では、関係層とダイクシス対象は導入しない。この点は次に見るDiewald (1991) のダイクシスのモデルに従っている。

2.2. Diewald (1991)⁹⁾

Diewald (1991:11) は、暫定的な定義としてはあるが、ダイクシスを「言語を用いた指し示し」(sprachliches Zeigen) と規定している。この規定は、直感的に理解しやすい形でダイクシスの一つの捉え方になっており、本稿のダイクシスの定義の中に取り込んでいる。

言語を用いた指し示しという記述は、Diewald (1991:19) はメタファーであるとしている。視覚的に認識可能な対象を、指などを用いて指し示すという日常の非言語的指し示し行為との類似性に基づいているということである¹⁰⁾。例えば、花瓶を指で指し示す行為は、指先を起点に、そこから発したベクトルが花瓶を着点に向けて進んでいるというイメージで捉えられる。このイメージを例えば「明日」というダイクシス表現の発話の際におこなわれるダイクシスに投影すると、原点が発話時にリンクされ、そこを起点に指示対象である明日を言語的に指し示していると記述されることになる。

指し示しという行為は、言語的行為としても日常的な非言語的行為としても、ベクトルの行為である以上、起点が必然的に存在する。非言語的指し示し行為では、例えば、指先が起点になり、そこから対象物を指し示している。指先などの起点が存在しないことはありえない。言語的指し示し行為も同様である。指先が担っている機能を原点が担っていることになる。ただし、非言語的指し示し行為と言語的指し示し行為では、起点を行為の現場から切り離せるかどうかに関し、決定的な違いがある。すなわち、指で指し示す行為は指先を当該の行為と切り離すことができず、起点は必ず行為の現場にある。一方、ダイクシスの場合は、起点(原点)は発話場面から切り離すことができるという違いである。すなわち、原点転移の場合である。

8) Sennholzは、ダイクシスは行為であると明示的に述べているわけではないが、本稿では、Sennholzのダイクシスのモデルは行為のモデルであると考えている。

9) Diewald (1991) のダイクシスのモデルの解説については瀧田 (2005) も参照されたい。

10) 上で触れたように、Sennholz (1985:168) の方向付けられた関係も非言語的指し示し行為に基づいている。また、Diewald (1991:19) が指摘するように、Bühler (1934/82:79) も道標の例を挙げながらダイクシスと日常の非言語的指し示し行為の関連性に言及している。

以上、Diewaldの暫定的な定義を見たが、Diewaldの正式なダイクシスのモデルはダイクシスプロセス (deiktischer Prozess) と呼ばれるモデルである。ダイクシスプロセスは指し示し部門 (zeigende Komponente) と命名部門 (nennende Komponente) からなる。これらは Bühler (1934/82) の指し示し (Zeigen) と命名 (Nennen) を精密化したものである。

指し示し部門は、指し示し的關係 (demonstrativer Bezug) と再帰的關係 (reflexiver Bezug) からなる。指し示し的關係は方向付けられた関係であり、Sennholzの第二公理に対応する。本稿では言語的指し示し行為ということになる。再帰的關係は、方向付けられた関係を原点へ向けて逆行し、原点とリンクされている要素へ至る関係と捉えたものである¹¹⁾。「再帰的」という表現は、方向付けられた関係を原点へ向けて逆行するイメージに基づいていると思われるが、原点とリンクされている要素へ至る関係は、Sennholzの第一公理、本稿では原点をリンクさせる行為に対応する。

以上、本稿のダイクシスの定義が参考にしてしているSennholz (1985) とDiewald (1991) のダイクシスのモデルを概略した。Sennholz, Diewaldのモデルは、ダイクシスを、原点を言語外世界の要素とリンクさせる行為と、指示対象を言語的に指し示す行為という二つの複合的行為であると捉えている点が共通し、本稿もこれに従うものである。ただし、Diewaldのモデルは、Sennholzのモデルの関係層とダイクシス対象は余剩的である¹²⁾ として導入せず、より単純化されている点が異なっている。本稿はこの点に関してはDiewaldに従っている。

なお、言語的に指し示す行為には必ず起点 (原点) が存在し、原点を特定の要素にリンクさせることなしに指し示すことはできない以上、言語的指し示し行為は必然的に原点をリンクさせる行為を内包していることになる。従って、ダイクシスの定義として言語的指し示し行為を規定し、さらに原点をリンクさせる行為は規定することは余剩的になる。しかし言語的指し示し行為はないが、原点をリンクさせる行為がある場合がある¹³⁾。このことを考慮し、本稿ではダイクシスの定義の中にこれら二つの行為を独立して記述している。

2.3. 三つの異なるダイクシスの捉え方

本節では、ダイクシスの一側面を適切に捉えているものの、原点が言及されていないため本稿のダイクシスの定義の中では記述していない三つのダイクシスの捉え方を見る。

11) 鈴木 (1996) は、H. Price (1953) *Thinking and Experience* を参考に次のように、述べている。

ある人がAが誰かBに向かって、「これ」と言いながら何かCを指さすときに、一体どのようなことが起こっているのかを、段階的に分析してみよう。

まずAが発した「これ」という音声によって、Bの注意がAの方に向けられる。ところがAは腕を少し体から離して指 (普通は人さし指) を突き出している。そこでBの注意はこの指に向けられる。しかし、面白いことに、Bの注意はこの指自体に止まることをせず、すぐに指を離れて指の前方に移動してゆき、Cに到達する。(p.104f.) (下線部は筆者)

鈴木の説明は、話し手の非言語的指し示し行為を知覚した聞き手の行為の説明であるが、下線部は再帰的關係とパラレルになっているといえよう。

12) Diewald (1991:6)

13) 「前／後ろ」などの言語表現の場合である。詳しくは渡辺 (2008) を参照されたい。

第一はダイクシスを記憶を媒介としない直接的な指示と捉えるものである。ダイクシス以外の指示タイプ、例えば、アナファー、固有名による指示、記憶指示などは、すべて記憶を媒介にする点が異なる。例えば、次のような記述である。

談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである。金水 (1999:68)¹⁴⁾

記憶が関与しない点では、本稿のダイクシスの定義も潜在的にはこの捉え方をしていることになる。なお、本稿のダイクシスの定義の「指し示し、言語的文脈に取り込む」という記述は、金水 (1999) のこの記述中の表現に従っている。

第二は、ダイクシスを指示対象の同定が発話場面に依存する指示と捉えるものである。これは、一般的に言及されるダイクシスの捉え方であるが、例えば、次のような記述がある。

- A. Deixis is the name given to those aspects of language whose interpretation is relative to the occasion of utterance (Fillmore (1966:220))
- B. Deixis ist somit die kontextabhängige Denotation außersprachlicher Elemente mittels bestimmter sprachlicher Ausdrücke (Diewald (1991:13))¹⁵⁾
- C. 現場指示とは指示物の同定が外界または出来事記憶にもとづいて行われる場合である。(吉本 (1992:109))¹⁶⁾

この捉え方は、聞き手がおこなう同定という行為に基づいてダイクシスを他の指示から分類している点に特徴があるが、発話場面とは何か、それはどのような要素からなるのか、同定とは何かを考える必要がある。この問題は稿をかえて考察したい。

第三は、第一と第二の捉え方を含む岡崎 (2004) の次の複合的な捉え方である。

【原則的な直示の定義】(仮)¹⁷⁾

- I 意図 話し手がIV場面に存在するIII対象を、言語文脈に取り込むために行う。
- II 方法 話し手の発話場所を座標軸として、発話そのものでIII対象を指し示す。また、「指差し」等の身体的指示動作は、直示の補助的ツールである。
- III 対象 談話空間において、話し手が視覚・聴覚等で物理的に、また感情・感覚等で仮構的にその存在を捉えられる全てのものごと。
例 (仮構的) なかなかこの思いが彼女に伝わらない。
- IV 場面 話し手と聞き手の、談話空間及び談話時間が一致する場。

(岡崎 (2004:61))

岡崎の定義はコソアを対象としたものであるため、発話場面、指示対象が限定された定義になっているが、ダイクシスに関する四つの側面を複合的に記述してダイクシスを定義している。その中で、「II 方法」において「発話場所を座標軸として」いる点が上の第二

14) 金水は、ダイクシスという用語の代わりに「直示」という用語を用いている。

15) Diewald (1991) の中心的なダイクシスの捉え方は上で見たように異なるものである。

16) 吉本は、発話場面ではなく外界という用語を用いている。なお、吉本は、出来事記憶にもとづく指示もダイクシスに含んでいるため、吉本のダイクシスは本稿のダイクシスよりも広義である。

17) 岡崎 (2004) は、この定義は仮のものだとしている。

の捉え方と関連し、「発話そのもので対象を指し示す」としている点が第一の捉え方と関連している。しかし、岡崎の定義は、同定が関与していない点では第二の捉え方とは異なる。原点は無標的には発話場面構成要素にリンクされることを考慮すると、岡崎の定義は、Sennholz (1985), Diewald (1991), 本稿のダイクシスの捉え方を原点が無標的な場合に特化した形の記述になっているといえよう。

3. ダイクシスの指示対象に関する二つの問題

本節では、ダイクシスの指示対象に関する次の二つの問題を考察する。第一は、ダイクシスの指示対象は言語外世界とどのような関係にあるのかという問題である。第二は、「あなた」、人称的用法のソの指示対象は、他のダイクシス表現においては見られない性質を持つ場合があるという問題である。

3.1. ダイクシスの指示対象と言語外世界の関係

この問題には、基本的には研究者の間でコンセンサスがある。すなわち、ダイクシスの指示対象は、言語外世界に直接存在する要素ではなく、話し手の心的表象であり、また、指示対象が存在する領域も、言語外世界そのものではなく、話し手の心的領域であるというものである¹⁸⁾。これは、例えば、金水/田窪 (1992), 金水 (2000) の次の指摘が端的に表している。

- A. 指示対象が存在する場所を仮に「直示空間」と呼んでおこう。直示空間は、話し手の視覚、聴覚その他のすべての感覚、心的対象化に基づいて構成される心的な空間である。(金水 (2000:161))
- B. 指示詞の指示対象は、外界を話し手が心理学的に「解釈」した世界の中に存在すると考えなければならない。つまり、指示詞は直接外的世界に向かうのではなく、心的な中間構造と結びつけられているのである。(金水/田窪 (1992:181))

本稿もこの考え方に従うことにする。すなわち、原点がリンクされる言語外世界の要素と、指示対象が位置する領域は、物理的な領域ではなく、話し手の心的空間（直示空間）であり、指示対象も物理的要素ではなく、心的表象ということである。なお、指示対象が存在する領域としての心的空間、ならびに、心的表象としての指示対象は、次章で考察する次元の問題で再び言及する。

3.2. 「あなた」、人称的用法のソの指示対象の特殊性

金水 (2000), 岡崎 (2004) は、人称的用法のソは、コ、アと異なり、厳密には現場指示

18) Bühler (1934/82) の指示野 (Zeigfeld) も心的空間 (直示空間) と捉えることができるであろう。もっとも、Klein (1978:19) が指摘するように、Bühler が指標野をどのようなものとして考えていたかは明確ではないと思われる。

用法ではない可能性を指摘している¹⁹⁾。本稿の立場からは、金水(2000)らの議論は人称的用法のソの指示対象は、他のダイクシス表現の指示対象とは異なる性質を持つ場合があることを示唆するものである。以下、見ていこう。

金水(2000:161)は、コ・アの現場指示用法の特徴として、次のa)からc)をすべて満たすことを挙げている。一方、ソはa), b)は満たすが、c)は満たさない場合があるとしている。

- a) 対象が直示空間に存在することが現場指示の必要条件である。従って、言語的先行詞を必要としない。(独立性)
- b) 話し手が対象を指し示す時点で、対象は存在している。そもそも、直示空間そのものが発話時点にしか存在しない。(同時性)
- c) 話し手は指示している時点で指示対象の場所が分かっている。(所在既知性)

例えば、次の例である。

(1) a. もしもし、田中君ですか。(金水(2000:162))

b. はいはい、山田君? そこ、どこ?

そして、「ソの現場指示すべてが言ってみれば「あなたのそばの～」「あなたの持っている～」「あなたの見ている～」等の形に置き換え可能だからである。」(p.162)、「もしソの現場指示が、直接的な指し示しではなく、「あなたのそばの～」のような記述的な意味に基づく指示であるとすると、現場指示と非現場指示の距離は一層近いものとして把握可能になる。」(p.163)と述べ、ソ全体が記述的な意味に基づく指示である可能性を示唆し、現場指示と文脈指示の統合の可能性を探っている。一方、渡辺(2003)は、ソの人称的用法が「あなたのそばの～」というような記述に基づく指示であるとすれば、コも「私のそばの～」というような記述に基づく指示となること、また、「ここ」であっても、(2)が示すように、所在既知性がない場合でも使用可能であることに基づき、人称的用法のソもコと同じ形でダイクシス表現であるとした。

(2) ここ、どこですか?

これに対し、岡崎(2004)は、渡辺の所在既知性は金水の所在既知性ではない旨、指摘し、次のように述べている。

渡辺(2003)では所在既知性について、指示対象の所在地(存在する場所=地名等)に関する情報の既知と解釈しているが、この場合の所在既知性の有無の差とは、指示対象(この場合、電話の相手)が本当に「そこ」に所在する(=存在すること)かどうかの既知の有無の差である。岡崎(2004:66)

そして、「そこ」を用いた(3)を挙げ、「結局((21)=本稿では(1))のような電話による会話では、話し手には聞き手の所在(=「そこ」に存在すること)に関する確かな認識はな

19) 金水は、距離的用法のソは考慮しないものとしている。なお、人称的用法のソにも二つの用法がある。一つは、「そこにいてください」のように聞き手がいる場所が指示対象に含まれる場合であり、もう一つは、「そこに置いてください」のように含まれない場合である。以下では前者のソのみが問題になる。この問題は、コに二つの用法があることに基本的には対応する。コに関しては、渡辺(2003)、金(2004)を参照されたい。

い為、所在に関する否定はできる。」(p.68)と述べている。

(3) (電話で) 田中1 もしもし、山田君

山田1 はいはい、そこ、どこ？

田中1 ここは、刀根山

山田2 うそ。そこにいるはずない。(岡崎(2004:67))

まず、所在既知性である。「ここ、どこ」の場合は、指示している場所がどこにあるかは、話し手は認識している。まさしく「ここ」にある。一方、「そこ、どこ」の場合には、指示している場所がどこにあるかは、話し手は認識していない。所在既知性をこの様に捉えれば、確かに、「そこ」には所在既知性はなく同意できる。もっとも、岡崎の所在既知性の説明は、一步踏み込んだ形になっているように思われる。まず、岡崎が挙げる(3)の「そこ」についてである。(3)では、「そこ」が二度使われているが、最初の「そこ」は、金水の意味での所在既知性がない用法である。一方、次の「そこ」は、若干不自然に聞こえるが、解釈すれば、「刀根山」を先行詞とする文脈指示用法の「そこ」であると思われる。最初の「そこ」と次の「そこ」は同じではないであろう。これが岡崎が挙げる(3)の「そこ」の筆者の解釈であるが、岡崎は、上の引用において、「話し手には聞き手の所在(=「そこ」に存在すること)に関する確かな認識はない為、所在に関する否定はできる」としている。これについての筆者の見解は、人称的用法の「そこ」に聞き手がいないことはありえないというものである。所在既知性がない場合であっても、聞き手は「そこ」にいるのである。岡崎のこの説明が適用されるのは、(3)の二番目の「そこ」を文脈指示用法として解釈した場合のように思われる。

ここまでは人称的用法のソの問題であったが、「あなた」にも所在既知性と類似した問題がある。この問題に関してはHarweg(1991:244)が興味深い指摘をしている。すなわち、差出人が不明の手紙に書いてあるichは、聞き手にとってダイクシスが十全ではないが、犯人が不明の誘拐事件において犯人に向けてSieという場合も、話し手にとってダイクシスが十全ではないという指摘である²⁰⁾。ここで問題になるのは、後者の場合であるが、「あなた」は、指示対象が誰であるか不明であっても用いられるということである。人称的用法のソに所在既知性がない用法があるように、「あなた」にも類似した用法があるといえよう。以上の問題は、他のダイクシス表現には見られない特殊な性質であるが、それでは、これらの「あなた」、人称的用法ソでは、ダイクシスがおこなわれているのであろうか。金水はソに関し問題提起しているわけだが、確かに、所在既知性がないものは指し示すことができないとは言える。厳密にこれに従えば、この場合には言語的指し示し行為ができない以上、ダイクシスではないことになり、本稿のダイクシスの捉え方に大きく関わってくる。この問題は大変大きな問題であり、詳細な検討が必要である。稿を改めて考察したい。

20) Harwegはダイクシスが十全ではない(unerfüllt)という表現を用いているが、差出人が不明の手紙の場合は同定の問題であり、誘拐事件の場合とは質が違う問題である。

4. ダイクシスの下位分類

本章では、ダイクシスを次元と原点関係の観点から下位分類する。なお、便宜上、ダイクシスの下位分類とするが、ダイクシスが原点が関与する指示であることには変わりはない。下位分類されるのは、ダイクシスがおこなわれる際の指示対象に関する性質と、指示対象と原点の関係である。結論からいうと、次元は空間、時間、人称の三つの次元を分類し、空間次元は物、場所の次元に下位分類する。原点関係は、原点内包関係と原点非内包関係を分類する。

以下、議論の見通しをよくするために、最初に、本稿のダイクシスの分類をいくつかのダイクシス表現とともに挙げておこう。

表1 ダイクシスの下位分類

原点関係 \ 次元	人称 ダイクシス	時間 ダイクシス	空間ダイクシス	
			場所ダイクシス	物ダイクシス
原点内包ダイクシス	私	今, 今日	コ	コ
原点非内包ダイクシス	あなた	明日, 昨日	コソア	コソア

4.1. 次元

いくつかの先行研究における次元の分類をまとめると次のようになる。

表2 次元の分類

	次元の分類				
Bühler (1934/82)/Sennholz (1985)	空間		時間	人称	
Diewald (1991)	場所	物	時間	人称	モダール
Levinson (1983)	空間		時間	人称	社会 テキスト

どのダイクシスの論考であっても、人称、時間、空間の次元は規定されている（Diewaldは空間を物と場所に分けている）²¹⁾。これだけ見れば次元の分類は単純に見えるが、次元とは何か、詳しく見ると複雑な様相を示す。以下、二つの問題を見ていこう。

4.1.1. 次元の対象

まず、次元は、指示対象が存在する領域を対象とするのか、あるいは、指示対象自体を対象とするのかという問題である²²⁾。次の記述は空間次元の説明であるが、ダイクシスの場 (Deixisfeld) を問題にしている点で前者の捉え方である。

Das lokale Deixisfeld kann beschrieben werden als der von den Äußerungspartnern

21) 社会次元などがなぜ認められないのかの議論はDiewald (1991:144f.)を参照されたい。

22) 前章で、ダイクシスの指示対象は、言語外世界と直接結びつくのではなく、指示対象が存在する領域は心的空間であり、指示対象はその空間にある心的表象であるとした。この観点から記述すれば、次元の対象は、心的空間なのか、あるいは、心的表象なのかという問題になる。

wahrgenommene Teil des physikalisch-dreidimensionalen, sinnlich wahrnehmbaren natürlichen Raumes (Sennholz (1985:71))

場所のダイクシスの場は、感覚で認識されうる物理的、三次元的な自然空間が、発話関与者によって認識された領域として記述されうる。

一方、次の記述は、ダイクシス対象²³⁾ (Deixisobjekt) を問題にしている点で後者の捉え方である。

Die Dimension leistet eine Klassifikation der Art des Deixisobjektes. (Diewald (1991:34))

次元は、ダイクシス対象のタイプの分類をおこなうものである。

Die deiktischen Dimensionen entstehen dadurch, daß die mittels Deiktika denotierbaren Kontextelemente nach ihrer Beschaffenheit zu Gruppen zusammengeschossen werden. (Diewald (1991:30))

次元は、ダイクシス表現によって指示されえるダイクシス対象が、その性質によってグループにまとめられることによって生じる。

次元のこの捉え方の違いは、人称次元、時間次元では本質的な違いはない。例えば、時間次元を、指示対象が位置付けられる領域が時間である次元と規定する場合と、指示対象が時間である次元と規定する場合とでは、どちらにせよ時間が問題になり違いはない。しかし、空間次元（物次元、場所次元）では、この捉え方の違いは次のような形で分類に影響を与える。

Diewald (1991) は、空間次元という次元を設定せず、時間次元、人称次元と同じレベルで物と場所の次元を区別している²⁴⁾。この点に関しDiewald (1991:230) は、物は境界が明確であり個体的存在であるが、場所は境界が明確ではないと指摘している。しかし、これは指示対象自体の違いである。Diewaldが物と場所の次元を区別するのは、上の引用で見たように、次元の対象を指示対象自体と捉えているからであろう。一方、次元の対象を指示対象が存在する領域と捉えると、物も場所も空間に存在するという点では同じである。Sennholzが空間次元のみ規定しているのは、上の引用で見たように、次元の対象を指示対象が存在する領域として捉えているからなのである。本稿では、次元の分類としては空間、物、場所のどの次元も認定し、空間次元は指示対象が存在する領域と捉え、物と場所の次元は指示対象自体を対象とした分類と捉えることにする。

4.1.2. 人称次元の特殊性

続いて、人称次元をどの様に捉えるかという問題である。

まず、英語などの三人称人称代名詞を人称次元のダイクシス表現とするか、あるいは、空間次元のダイクシス表現とするかという問題を見ておこう。

23) Diewaldはダイクシスの指示対象をダイクシス対象と呼んでいる。以下、ダイクシス対象と指示対象をともに用いる。なお、Sennholz (1985) もダイクシス対象という用語を用いているが、これは、関係層にある要素で、状況層にある指示対象とは異なる要素である。

24) 同様に、小泉 (1988:8) は「なお、空間の直示は、いわゆる指示代名詞としての直示詞と場所の指示詞とを分けて扱う方がよい。」と指摘している。

この問題は、英語など形態論的に一人称、二人称、三人称がセットになって人称代名詞、動詞人称変化語尾のパラダイグマを形成している言語を例にダイクシスを考察している際に生じる問題²⁵⁾ だと思われるが、一人称、二人称代名詞だけではなく、三人称代名詞も人称次元のダイクシス表現とされることがある。一方、Benvenist (1966) をはじめとして多くの先行研究が、一人称、二人称代名詞はコミュニケーションに直接関与する発話役割を担うのに対し、三人称代名詞はそうではないと指摘している。本稿もこれに従い、Sennholz (1985), Diewald (1991) 同様、三人称代名詞を人称次元のダイクシス表現とはせず、空間次元、物次元のダイクシス表現に分類する。

続いて、人称次元の性質は、空間次元と時間次元の性質とは異なることを見ていこう。

空間次元と時間次元は、言語外世界に物理的存在としてパラレルに存在する空間と時間を心的に抽象化したものである²⁶⁾。しかし、空間、時間と異なり、人称が言語外世界に物理的に存在するわけではない。以下、人称次元はどの様に捉えられるか、Sennholz (1985), Diewald (1991) の議論をまとめながら、筆者の解釈もまじえ見ていこう。

まず、人称次元において指示対象が存在する領域は、発話役割という抽象的な領域と規定される。例えば、Sennholzは次のように説明している²⁷⁾。

Die entscheidende Feststellung in bezug auf die Personaldeixis bzw. das personale Deixisfeld scheint mir die zu sein, daß es sich um ein rollentheoretisches Phänomen handelt. (Sennholz ((1985:143))

人称ダイクシス、人称のダイクシスの場に決定的に認められることは、役割という理論上の現象が問題になるということである。

そして、その領域の中で特定の発話役割を担っている要素が指示対象である。例えば、Diewaldは次のように説明している。

Die Besonderheit der personalen Dimension gegenüber allen anderen Dimensionen besteht jedoch darin, daß sie die jeweiligen Träger der abstrakten kommunikativen Rollen selbst denotiert. ((Diewald (1991:213))

他のすべての次元に対する人称次元の特殊性は、コミュニケーション上の抽象的な役割を担っている要素自体を指示することにある。

特定の発話役割を担っている要素とは、「発話をおこなう主体」と「発話が向けられている客体」である。すなわち、「私」の指示対象は「私」を発話する主体であり、「あなた」の指示対象は「あなた」という発話が向けられている客体である。ここで重要な点は、指示対象は物としての話し手、聞き手ではないことである。現実世界では言語の話し手、聞

25) この問題は、形態論的な人称を持たない日本語などを中心にダイクシスを考察する場合には生じない問題であろう。

26) 空間は純粋に物理的存在と規定できるが、物と場所の区別は人間による対象の把握の仕方の問題がある。

27) 「人称 (Person)」という名称はどのダイクシスの論考でも用いられているが、話し手、聞き手が問題になる点で「発話役割」という名称のほうが実体をよりよく表しているといえよう。しかし、以下では、一般的に用いられている「人称」を用いることにする。

き手は通常は人間である。人間は物であり、次元的には物次元の存在である。従って、人間を指差して「これ」「この人」と発話する場合には、物ダイクシスがこなわれていることになる。しかし、「私」「あなた」を発話する場合には、ダイクシス理論上は物ダイクシスがこなわれているわけではない。現実世界では、言葉を発し、言葉が向けられる対象は、三次元上に存在する物(典型的には人間²⁸⁾)である。しかし、「発話をおこなう主体」「発話が向けられている客体」は、ダイクシス的には物としての実体を持たない要素なのである。このことは、物としての実体を持たない超越的存在が、物としての実体を持たない対象に向けて言葉を発する場合にも、「私」「あなた」を用いることができることにもよく現れている。

人称次元の「発話をおこなう主体」「発話が向けられている客体」がダイクシス的には実体を持たないわけだが、Sennholz(1985:148)は、三次元である物次元、一次元である時間次元との対応で、人称次元はゼロ次元であると述べている。また、Diewaldも、人称次元は物次元とは異なるので、例えば、電話などの会話であっても、「私」「あなた」の同定が可能になると次のように述べている。

Da die Dialogrollen abstrakte Entitäten sind, können und müssen sie durch die sie dentoierenden Deiktika „ich“ und „du“ räumlich nicht fixiert werden. Dies hat ersten den Vorteil, daß sie auch in markierten Kommunikationssituationen (z.B. räumlicher und zeitlicher Trennung der Partner), eindeutig identifizierbar sind. (Diewald 1991:215))

発話役割は抽象的な要素であるため、発話役割はそれを指示するダイクシス表現 ichとduによって空間的に位置付けされることはできず、また、必要もない。これは、まず、発話役割は有標的な発話場面(話し手と聞き手が空間的、時間的に離れている場合)においても一義的に同定できるというメリットを生む。

以上、人称次元が空間次元、物次元と性格が異なることを述べたが、人称次元と物次元は関連していることも確かである。Sennholzは、まとめると、発話意図の観点からは、例えば、「私は体重50キロです」という発話では、発話をおこなう主体ではなく物としての人間が問題になっていると指摘している。この点で「私」は物と関連するが、ダイクシス的には、「私」は人称次元のダイクシス表現なのであり、物次元のダイクシス表現ではないのである。人称次元が複雑なのは、現実世界では、発話をおこなう主体は物としての人間だからである。

4.2. 原点関係の分類

次元の下位分類をダイクシスの縦軸とすると、原点関係の下位分類は横軸となる下位分類である。以下、SennholzとDiewaldの原点関係の捉え方を見ていこう²⁹⁾。

空間次元においては相対的遠近が問題になることがある。例えば、視野に入っている本

28) 機械が言葉を発する場合には原点転移の問題が生じる場合がある。

29) 原点関係は筆者の造語である。原点と指示対象の関係については、Sennholzは Autodeixis/Hererdeixis, Diewaldは距離 (Entfernung) という名称を用いている。

を「この本」と言う場合が「近」で、「あの本」と言う場合が「遠」である。これに対し、Sennholz (1985:45ff.) は、近という概念は極限まで近いことは表せても、二つの対象が重なることを表せないとしている。例えば、「今」の指示対象である時間は、発話時に近なるのではなく発話時を含んでいるのである。そこでSennholzは、Harweg (1991) の Autodeixis/Heterodeixis の分類に従い、原点とダイクシス対象という二つの点的な要素が、重なる (Autodeixis) か、重ならないか (Heterodeixis) という絶対的な関係として原点関係を分類している。ただし、Sennholzは、前章で見たように、ダイクシス理論上、仮説的に規定される関係層と言語外世界である状況層という二つの層を規定している。その中で、原点関係は関係層の問題であり、そこに位置付けられる原点とダイクシス対象は、どちらも点的な要素として想定されている。従って、Sennholzのモデルでは、原点関係は必然的に重なるか重ならないかの問題になり、相対的な遠近の問題にはならない。

一方、Diewald (1991) は、指示対象が原点がリンクされている要素を含むかどうかという内包関係で原点関係を分類している。原点がリンクされている要素が指示対象に含まれる場合が原点内包ダイクシスであり、原点がリンクされている要素が指示対象に含まれない場合が原点非内包ダイクシスである。図示すれば次のようになる ((●=原点, ○=原点がリンクされる要素)。



図3 原点関係の図式

原点内包/原点非内包という用語はDiewaldに従っているが、正確に言えば、原点が指示対象に含まれるか含まれるかではなく、原点がリンクされる要素が指示対象に含まれるか含まれないかが問題になる。また、Diewald (1991:203) は、Sennholzと異なり、原点内包は近であり、原点非内包は遠であるとしている。これは、原点から指示対象に向かうベクトルの長さを問題にしていると思われる。しかし、内包関係と遠近は、Sennholzが指摘するように相容れない関係である。ただし、原点非内包関係においては、Diewald (1991) も述べるように、遠近は問題になる場合がある。例えば、コソアにおける遠近の問題である。なお、人称次元の場合には、発話役割自体が物理的実体を持たないため、厳密には内包関係ではなく、重なるか重ならないかが問題になる。

5. ダイクシス表現の記述

ここまでの考察は行為としてのダイクシスを対象とし、本稿の次元と原点関係の分類もダイクシスを対象とした下位分類である。しかし、ダイクシスは、ダイクシス表現と表裏一体の関係にある。すなわち、Sennholz (1985:172) が述べるように、ダイクシスは言語を用いた指し示しである以上、ダイクシス表現の発話を必ず伴う³⁰⁾。逆に言えば、ダイクシス表現の発話はダイクシスがおこなわれていることの現れである。それでは、ダイクシス表現はどのように記述されるのであろうか。以下、ダイクシス表現の次元、原点関係に関する情報が、先行研究においてはどのように記述されているか見ていこう。これには二つのタイプがある。次元、原点関係に関する情報を指示対象に関する性質として記述するタイプと、意味として記述するタイプである。まず第一のタイプである。

Sennholz (1985) は、ダイクシス表現は以下の部門、表示を持つとし、例えば、hierを以下のようにパラフレーズしている。

指示部門 (以下の例の網掛け部分)
 原点部門 ——— 原点表示 (以下の例の下線部分)
 ——— 関係表示 (以下の例の囲み線部分)

hier : 発話場所を含む場所³¹⁾

指示部門は、指示対象がどの次元に属するかを指定している。原点部門 (die Origo-Komponente) は、原点表示 (Bezeichnung der Origo selber) と関係表示 (Bezeichnung der Relation) からなる。原点表示は、単純に原点が関与することのみを表示すると思われるが、hierの例では、原点表示として原点が無標的に置かれている要素が記述されている。関係表示は、原点と指示対象の関係が原点内包か原点非内包かを指定している³²⁾。

Sennholzの記述の特徴は、ダイクシス表現の次元と原点関係に関する情報を意味としてではなく (Sennholz (1985) は意味という用語を用いていない)、指示対象の性質として捉え、それをパラフレーズを用いて記述している点である。同様に、Diewald (1991) も、hierを次のように記述している。一言で言えば、hierは、「指示対象は場所次元」「指示対象は原点に含まれる」という情報を持つと規定されよう³³⁾。

Ein deiktisches “hier” gibt Auskunft darüber, daß das Deixisobjekt ein Ort ist, daß also in der lokalen Dimension gezeigt wird und daß der gezeigte Ort als nahe der Origo, d.h. als origoinklusiv, betrachtet wird. (Diewald (1991:132))

ダイクシス表現hierは、ダイクシス対象が場所、すなわち、場所次元の中に指示され、

30) Demnach werden (...) die Deiktika definiert als diejenigen Ausdrücke, an die das Phänomen Deixis gebunden ist bzw. mit Hilfe derer die Deixis sprachlich zum Einsatz gebracht wird. (Sennholz (1985:172))

ダイクシス表現は、ダイクシスという現象に結びつけられている、あるいは、その助けを借りてダイクシスが言語的におこなわれる言語表現である。

31) 下線部等は筆者による。原文は次のとおり、/Ort, der den Äußerungsort einschließt/ (p.175)

32) 原点表示と関係表示の説明は、Sennholzの説明が明確ではないため、筆者がhierのパラフレーズに基づき解釈した説明である。

33) さらに、glossの解釈が問題になるが、Levinson (1983:74) は、例えば、todayを次のように記述している。
 „today“ glosses as the diurnal span including CT

指示された場所は、原点から近³⁴⁾、すなわち、原点内包と見なされているという情報を与えるものである。

続いて第二のタイプである。上でDiewald (1991) のhierの記述を見たが、Diewald は別の箇所では次のように述べている。

Die Dimensionen sind daher als semantische Merkmale zu beschreiben, die die Art des Deixisobjektes benennen (Diewald (1991:30))

次元はそれゆえダイクシス対象の種類を記述する意味素性として記述されうる。

Ein Deiktikon enthält also in seinem nennenden Bestandteil ein Sem, das den Bereich, in dem sich das zu denotierende Deixisobjekt befindet, entweder als einen Bereich, in dem sich auch die Origo befindet, oder als einen, in dem sie sich nicht befindet, darstellt. (Diewald (1991:34))

ダイクシス表現は、それゆえ意味に関する構成要素の中に、指示されるダイクシス対象が見いだされる領域が、原点が見いだされる領域なのか、あるいは、原点が見いだされない領域なのかを表す意味素性を含んでいる。

最初の引用は次元についてであり、次の引用は複雑な記述になっているが、原点関係についてである。一言で言えば、例えば、hierは [+場所] [+原点内包] という意味素性を持つと記述されるということである。

以上、ダイクシス表現の二つの記述のタイプを見たが、この問題を精密に考察するためには、ダイクシス表現だけではなく、言語表現の語彙情報はどのように記述されるのかを考える必要がある。また、意味とは何かという問題も出てくる。これらの問題は、本稿の問題設定を超えるものであるので詳しくは検討しないが、本稿では、以下のような理由で次元のみ意味として記述する。

Diewald (1991:33) は、まとめると、次元は指示対象のみが対象になるが、原点関係は指示対象と原点との関係が対象になる点で異なると指摘している。Diewaldはダイクシス表現とは関連させていないが、この指摘は、ダイクシス表現の記述方法と次のように関連する。すなわち、次元の意味の記述は、指示対象のみが対象となる点で他の言語表現の意味の記述と同じ形で可能である。例えば、「ここ」は [+場所] という意味を持つが、これは「場所」という名詞が [+場所] という意味を持つことと同じである。また、「私」は [+話し手] という意味を持つが、これは「話し手」が [+話し手] という意味を持つことと同じである。しかし、原点関係は、ダイクシス表現以外の言語表現を持つことはない、ダイクシス表現に固有な語彙情報である。この点でダイクシス表現は他の言語表現とは異なるのである。

以上、ダイクシス表現が持つ次元と原点関係に関する語彙情報を考察したが、最後に、Sennholzのダイクシスモデルの関係層に関するSitta (1991) の見解を簡単に見ておこう。

Sitta (1991:50) は、Sennholzは関係層の位置付けを明確には述べていないとした上で、関

34) Diewald (1991:203) は原点関係に関して内包用法を近として記述している。

係層はダイクシス表現の意味であると解釈している。この解釈では、ダイクシス表現は、[＋原点を起点にダイクシス対象を着点として指し示すこと]あるいは[＋言語を用いて指し示すこと]という意味素性を持つことになる。しかし、本稿では、意味素性に関しては、次元の素性のみをダイクシス表現に認めているので、例えば、「ここ」のようなダイクシス表現自体がこの意味素性を持つわけではない。本稿の意味の捉え方からは、この意味素性は「ダイクシス」という名詞自体が持つ素性である。ただし、もちろん、ダイクシス表現とダイクシスは表裏一体であるから、ダイクシス表現は言語を用いて指し示すという心的プロセスがおこなわれていることを表す言語表現ではある。

6. おわりに

本稿ではダイクシスの定義、分類に関する様々な言説を概観し、本稿の捉え方を述べた。論考の性格上、具体的言語現象はほとんど扱わなかったが、最初に述べたように、概念は具体的言語現象を説明するツールである。本稿で考察した様々な概念がどの様に言語現象を説明するのか、さらなる考察を課題としてひとまずここで筆を置くことにする。

付記： 本稿の執筆にあたり、複数の匿名の査読者より数多くの貴重なコメントをいただいた。ここに感謝の意を述べるものである。

参考文献

- 安藤貞雄 (1986a) 「日英語のダイクシス (上)」『英語教育』 2月号, pp.70-75.
 安藤貞雄 (1986b) 「日英語のダイクシス (下)」『英語教育』 3月号, pp.74-79.
 岡崎友子 (2004) 「「コソアで指示する」ということ：直示 (ダイクシス) についての覚書」『語文』 83. pp.59-70 (大阪大学国語国文学会)
 金善美 (2004) 「現場指示と直示の象徴的用法の関係」『日本語文法』 第4巻第1号 pp.3-21.
 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 6/4. pp. 67-91
 金水敏 (2000) 「指示詞」『別冊國文學 現代日本語必携』pp. 160-151.
 金水敏/田窪行則 (1992)『指示詞』ひつじ書房.
 小泉保 (1988) 「空間の時間における直示の体系」『言語研究』 第94号. pp. 1-24.
 小泉保 (1990)『言外の言語学』三省堂.
 鈴木孝夫 (1996)『教養としての言語学』岩波書店
 瀧田恵巳 (2005) 「ダイクシス体系におけるドイツ語指示詞の位置づけと分類について－Diewald (1991) によるherとhin及びその二重不変化詞の分類を例に－」『言語における時空をめぐる 言語文化共同研究プロジェクト2004』 pp.-21-30, 大阪大学言語文化研究科.

- 吉本啓 (1992): 「日本語の指示詞コソアの体系」 金水/田窪(編)『指示詞』 pp. 105-122. ひつじ書房.
- 渡辺伸治 (2001) 「ダイクシス ―その全体像の解明の試み―」『言語における指示をめぐる 言語文化共同研究プロジェクト2000』 pp.1-20, 大阪大学言語文化研究科.
- 渡辺伸治 (2003) 「ダイクシスと指示詞コソア」『大阪大学言語文化研究』 29, pp.417-434.
- 渡辺伸治 (2007) 「ダイクシスを概観する」『言語』 1月号, pp.32-39, 大修館書店
- 渡辺伸治 (2008) 「原点転移システムと準ダイクシス表現」『大阪大学言語文化研究』 34, pp.83.92, 大阪大学言語文化研究科.
- Benveniste, Emile (1966) *Problèmes de linguistique générale*.
- Bühler, Karl (1934/82) *Sprachtheorie*. Uni-Taschenbuch 1159. Stuttgart. Gustav Fischer Verlag.
- Diewald, Gabriele (1991) *Deixis und Textsorten im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Fillmore, Charles, J. (1997) *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Harweg, Roland (1991) *Studien zur Deixis*. Bochum: Brockmeyer.
- Herbermann, Clemens-Peter (1988) *Modi Referentiae*. Heidelberg: Carl Winter.
- Klein, Wolfgang (1978) Wo ist hier? Präliminarien zu einer Untersuchung der lokalen Deixis. *Linguistische Berichte* 58, pp.18-39.
- Levinson, Stephen (1983) *Pragmatics*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Lyons, John (1977) *Semantics* 2. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Rauh, Gisa (1983) Aspects of Deixis. In: Rauh, Gisa(ed.) *Essays on Deixis*. pp.9-60. Tübingen: Narr.
- Sennholz, Klaus (1985) *Grundzüge der Deixis*. Bochum: Brockmeyer.
- Sitta, Georg (1991) *Deixis am Phantasma. Versuch einer Neubestimmung*. Bochum: Brockmeyer